

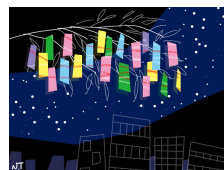
## ねがいのいえニュース 第66号

社会福祉法人ねがいの杜 広報紙・2023年7月15日発行

発行責任者: 藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



久しぶりのニュースになりましたが、みなさまお元気でお過ごしでしょうか？3年に渡って翻弄されたパンデミックもいったん収束を迎え、世界に活気が戻ったかのようです。一方で、終わらない戦争の報道に胸を痛め、理不尽な侵略を許せない気持ちが止まない毎日です。

「ねがいのいえ」は昨年、「ねがいの杜」へと事業継承し、秋から春にかけて3軒の新拠点もスタートし極度の多忙に追われましたが、新人スタッフの入職と育成が進み、ようやく一息つくことができました。そして、経理の処理が完了したNPO法人ねがいのいえは、3月末をもって解散したことを報告いたします。「ねがいのいえ」という名称は、グループホームの事業所名として残ります。

### 他者を気遣う思い

療養中だった母を昨年亡くされた美紀さん。幼児の頃から絶えず続いていた、常に自分の顎を叩き続ける自傷行為が消失したエピソードを前回報告した。以来数ヶ月、自傷も異食も奇声もなく、穏やかな表情でグループホームのリビングに静かに座っている姿は、スタッフと見間違えるほどだった。その美紀さんが新年度を迎えた頃、自傷と大きな奇声を現すようになり、時間が数ヶ月戻ったかのようだった。

生活介護でもホームでも、自傷する手を止め、異食がないよう見守るスタッフを常にマンツーマンで配置するのが、ねがいの杜の支援の特色であり、理念である。そうして心と体を癒す心のケアの関わりを毎日務めたが、改善が進まない日々が3週間ほど続いた。

発声と自傷が一層の激しさを増したある晩、中堅スタッフの関わりでも収まる様子がなかったため、手伝うこととした。顎を叩き続ける腕を止めると、こちらを振り向く美紀さんと目が合う。そして片腕を張り合うやりとりから入り、やがて背中に回り、心のケア用語で「スプーン」と呼んでいる姿勢になって全身に張り合う。腕、背中、足と、硬い緊張を感じつつ、母を亡くして数ヶ月、明るく穏やかに暮らしてきた美紀さんの心が、がんばり過ぎて糸が伸びきってしまったのではないかと想像した。自分も大切な存在を亡くした時の想いを重ねて、一緒に泣こうと心で話しかけた。そこにしばらく一緒にいることで、互いに癒されるであろう、と予測した。いわゆる、支援の見通しというものである。

しかし、何かが違う。美紀さんと自分の想いの間にズレを感じ、体の緊張は減弱せず、自傷も発声も改善しない。それは、こちらの見立てが間違っていたことを意味する。では彼女は今、何を悲しんでいるのだろうか？

ふと、数ヶ月前の美紀さんと同じような境遇に見舞われ、週末の帰宅ができなくなった入居者のえりさんのことが思い浮かんだ。

「えりさんが最近、週末も家に帰らずずっと泊ってるのが気になっているのかな？」

美紀さんの体が大きく揺れ反応が現れた。

「そうだね。いつもは週末に帰ってた人がずっと帰らずにいたら気になるね」さらに反応する。

「そうなんだよ。美紀さんと同じように、お母さんの病気がひどくなって入院しているんだ」

「えりさんのことが心配だったんだね」

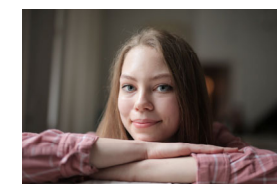
美紀さんの両腕、両足が激しく動き、止めるやりとりにも一層力を要したが、しっかりと張り合い全力で受け止めた。

「でもね、えりさんのお母さんは、美紀さんの時と違って不治の病気ではないんだ。もうすぐ良くなって退院してくるから、そしたら家に帰ることができるんだよ」

しばしの張り合いが続いたあと、美紀さんの体から力が抜けて、ほどなく落ち着いていった。

「みなさんは言葉では語らないけど、お互いの気持ちをわかり合ってるよね。美紀さんが心配する想いはえりさんにもきっと伝わっていると思うし、そのことを美紀さんもわかっているよね。心配しなくて大丈夫だよ」

日によって落ち着かないことはあるものの、その日から穏やかな美紀さんに戻ったようである。言葉を交わさない重度障害の方たちの中には、私たちにわからない気持ちの交歓があるに違いない。



### 進む医療的ケア児の支援制度

永田町子ども未来会議が超党派で議論を重ね、医療的ケア児支援法が成立し、医ケア児を支える体制が急速に進行している。そのスピードは驚異的である。先駆的活動を率先して実践する全国のリーダーたちが、まさに幕末維新の志士のごとく、社会運動家として政治を動かし国を変えてくれたおかげである。

そんなリーダーたちの事業所があるはずの地域から、医ケアの幼児やインシュリン注射の成人が、誰も引き受けてもらえなかったと遠方のねがいの杜まで頼って来られる。

支援センターができて、専門の相談員に話を聴いてもらえたとしても、実際支援を引き受けてくれる事業所がなければ解決につながらない。20年前に相談支援の整備が急速に進められたが、難しいケースを引き受ける事業所が見つからず、多くの方の問題を解決できなかった時代と同じである。

その後、ヘルパーや放課後デイが増え、重心デイも現れて、相談支援のコーディネーターが少しずつ機能していったように、医ケア児の支援も数年がかりで機能していくだろうか？

政治活動に縁のない私たちは、その分野は得意な方たちに任せその恩恵を受けながら、難しいケースを断らない実際支援を現場で続けていくのみである。

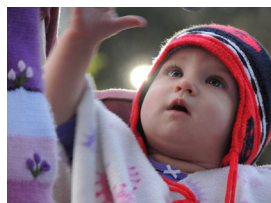
### 見学希望の保護者様

特別支援学校 PTA の保護者の方から見学をしたいというお電話があった。どの施設を見たいのかうかがったところ、まだ小学部でこれから勉強を始めるところなので、あまりわかっていないとおっしゃられた。いろいろかがい総合すると、多くの保護者が、卒業後に通所できる施設を見学したいと思われることがわかった。

「では生活介護の施設をいくつか見学する予定ですか」と聞くと、「そうです」と言われた。「それなら、生活介護についての一般的な話は他の施設でも聞けると思うので、うちでは別な話をさせてください」と伝えた。「それはどんな話ですか」

「現在学校に通われているみなさんはもちろん、卒業後に通える所があるかどうか最大に関心事だと思います。しかし、通所が見つければみなさんの不安や課題は解決でしょうか？いつか家族から離れて安心して暮らせる場所があるのか、最終的な課題なのではないでしょうか？そして、その最終的な施設へたどり着くまでの間、家族で暮らしている間にも、たくさんさんの困難がみなさんの生活に次々と起きます。子どもの時代であっても、ご家族には 24 時間、休みのない支援が必要なはずですよ。」

しかし、福祉事業所は営業時間が決まっている。放課後デイが関わるのは施設に通ってきている時間だけ。その児童が家に帰ってからどれだけ大変なことになっていても関わらない。休日も、そして卒業後の生活もしかり。卒業して生活介護に入れたとしても、家族が倒れて自宅で暮らせなくなればどこかの施設へ行ってしまう関係は途切れる。



しかし、人と関係を築くのに時間のかかる重度障害の人たちが、ある日突然、誰も知らない遠い施設へ強制送還されるのは、最大の不幸です。ねがいのいえは、出会った利用者を 24 時間年中無休で支え、成長に合わせ必要な支援をひとつひとつ創ってきました。そして今、子どもから出会った人が成人し、ねがいのいえのグループホームへ入居しています。

昨今、障害福祉界にグループホームブームが到来し、新しいホームができたので入居者を募集します、という DM が大量に届きますが、そのようなホームで暮らせるのは中軽度で自立度の高い障害の人たちのみ。強度行動障害や医療的に重度な方は結局入れるところが見つからないというのが現状です。

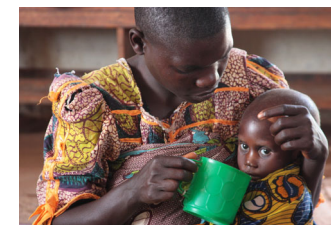
本当に重度で難しい人たちがホームで安心して暮らすためには、子どもから出会い、ヘルパーとショートステイを駆使して 24 時間、その生活、成長を支え続けた支援者が背負う形しかない。だから同業者にいつも、みんなでやりましょう、出会った人を生涯支えましょう、と訴えています。保護者のみなさんにそんな話をさせてください」

すでに話の途中から一方的な講和のようになり、電話の向こうから黙ったまま涙ぐむ息が漏

れ聞こえていた。しばらくの間ののちに、「本当に、親の心配、気持ちを、全部おっしゃってくれました。ぜひもっと聞かせてください。」と言われ、後日、正式に見学の申込みをされた。

### 第三段階のその先

大学生の頃、中東紛争やアフリカの飢饉が深刻さを極めていた。青春時代まっただ中、様々思い悩んでいた自分は、映像で見る飢えた難民の子たちも、青春時代には自分と同じように思い悩むのだろうかと思っていた。その後、授業でマズローの 5 段階を学び、生命の安全が保証されなければ次の次元の欲求にはあがらないことを知り、納得した。



昔、施設に閉じ込められた人たちは、食は保証されたが、支配への恐怖や不安が満ち、安心と安全を求める段階だった。時を経て今、重度の障害のある人も、人権を尊重され、多くの人が毎日通う場所が保証され、呼び捨てで呼ばれない社会になった。それでも、強度行動障害がなくなるのは、本当の意味で心に寄り添う安心を得られていない証しである。

グループホームねがいのいえの入居者のみなさんは、20 年に渡る心に寄り添うケアを受けて今、嵐のような他害と破壊を繰り返し、他の事業所では週に 2 時間の行動援護が精一杯と言われた方が、毎日穏やかに暮らす。自宅でうまく過ごせなかった方たちが、日中は畑でたくさん体を動かし、夜は早々に入眠する。ストレスもなく、スタッフは愛情にあふれている。不満のない毎日のはずである。しかし、なぜかイライラしている人がいる。原因となる要因が思い当たらない。満たされているはずなのになぜ・・・

ふと、マズローを思い出す。生活介護なのに目一杯の労働をする職場は、彼らに第三段階の社会的欲求まで保証していると思われる。それでもイライラする彼らの姿は、「この生活に何の不満もない。でも何かが足りない」という人間として当然の訴えなのではないか。

全国の施設はすべからく、まずこの段階までクリアしなければならない。そしてこの先は、何を彼らに提示してあげられるだろう。仕事以外に、生涯を打ち込める楽しみ、生きがい、他者の役に立ちたい、そして、愛し合う人を見つけたい。

最低限の安全が守られればよしとされた 20 世紀の障害福祉を経て、21 世紀は、第三段階が重度障害の方の目標のように思われている。しかし私たちは今、そんな方たちにも健常者と同じ心があることを知っている。ならばその先をどう支えたらいいのか、本気の議論をしなければならない。もうそんな時代である。

### トラウマケアの実践的な専門書発刊

私たちが師事するトラウマケアの先生が著書を発刊されました。今まで癒すことができなかつた難しいケースへ、新たな地平を切り開くメソッド。ねがいの杜の実践も寄稿しています。

『[わが国におけるポリヴェーガル理論の臨床応用](#)』 花丘ちぐさ編著 岩崎出版

